

26T-am07

サフランの形態学的特性に基づく品質評価：国内外市場品の比較

○家入啓至¹, 高浦佳代子^{1,2}, 木村康人¹, 上田大貴¹, 後藤一寿³, 高橋京子^{1,2} (¹阪大院薬, ²阪大博, ³農研機構)

【背景・目的】サフラン(*Crocus sativus* L.)の日本最大の生産地・大分県竹田市では、1903年頃の種苗導入後、日本独自の室内栽培法(竹田式)を開発し、高品質のサフランを供給してきた。しかし、経済性優先の安価な輸入サフラン流入と、農業従事者の高齢化で栽培地の衰退が進行している。そこで竹田式栽培法の優位性を明確にし、その実践知継承の意義を検証した。【方法】歴史検証は、国立国会図書館デジタルコレクション収載の明治期以降の文献、並びに昭和期以降の学術論文・データベースからサフランの栽培方法の記述を網羅的に抽出・解析した。また、国内外の原型のサフランサンプル17検体を入手し、その外部形態をデジタルマイクロスコープ(VHX-6000:KEYENCE)で観察し、計測結果を統計学的に比較した。17検体のうち、竹田市産は8検体、海外産9検体(フランス、スペイン、イラン等産/フランス、アメリカ、モロッコ、日本市場品：うち薬用2検体)であった。【結果・考察】栽培法の記述に関する歴史検証の結果、室内栽培(籠栽培)に関する記述は1944年の資料が初出で、それまでは一般的に露地栽培が行われていたことを確認した。露地栽培中心の明治期より、サフランの品質保持には雌蕊の黄色・白色部分を除外する旨が記されており、現行の日本薬局方においても、「花柱の黄色部10.0%以上を含まない」ことが純度試験の項に明記されている。蒐集したサンプルの全長及び黄色部の長さを比較したところ、竹田産サンプルの全長(平均)は2.2cm、海外産の平均は1.8cmで有意差が認められた。特に、モロッコ産は全長平均が1.4cmと特に短く、柱頭が欠損している形態を呈する検体が散見した。一方、竹田産では形態的に不適とされる黄色部は全長の1%程度で、海外産との比較において有意に小さく、その高品質性を示唆した。